Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-05-30

地域住民と協働した福崎町中島区有文書の保全活用事業について（活動報告）

井上，舞

(Citation)
Link : 地域・大学・文化 : 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター年報,15:136-140

(Issue Date)
2023-12

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100489547

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489547

(10) 註4文献などのほか、近年では一号炉訴訟の裁判記録をまとめた『伊方原発設置反対運動裁判資料』（全七巻、クロスカルチャー出版、二〇一三―一四年）が出版されている。

(11) 伊方一号炉訴訟については他に、藤田一良弁護士の旧蔵資料が立教大学共生社会研究センターに所蔵されている。

地域住民と協働した福崎町中島区有文書の保全活用事業について

井上　舞

はじめに

神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターと神崎郡福崎町は、二〇〇六年度より共同研究「福崎町の地域歴史遺産掘り起こしおよび大庄屋三木家住宅活用案の作成等」を開始した。二〇一七年度からは事業を「福崎町の地域歴史遺産の掘り起こし」「大庄屋三木家住宅文献史料調査」に分け、様々な活動を展開している。本稿ではこのうち、二〇一八年度から二〇二三年度にかけて「福崎町の地域歴史遺産掘り起こし」の中で取り組んできた、福崎町南田原中島区での区有文書整理について報告する。

整理会発足の経緯

最初に、福崎町教育委員会を通じて地域連携センターに資料整理・調査の依頼があったのは二〇一七年度のことである。それ以前、二〇一三年度に中島区から町教委に当該資料について相談があり、福崎町立神崎郡歴史民俗資料館が対応したが、そのときは現状確認のみが行われている。二〇一六年度末に当時の区長であった松岡宣幸氏より再度町教委に連絡があり、これを受けた町教委が再調査を行った上で、共同研究の一環として文書の整理・調査ができないかとの相談があった。

調査対象となったのは、中島区の公民館や、旧公民館で現在は集会施設となっている「五合堂」と呼ばれる建物内に長らく保管されてきた近代文書（中島区有文書）と、松岡氏が同区内の住民から引き取った近世～近代文書および典籍類（中島区松岡家文書、現在は区の所有）である。町教委の事前調査報告を確認したところ、いずれも破れていたり、箱に押し込まれて皺だらけになっていたものの、地域で整理作業を行うことは可能と考えた。そこで、中島区および町教委と協議して、中島区内で参加者を募り、これらの文書群の整理を進めることにした。

区有文書の整理①

以上の経緯を踏まえ、二〇一八年度より中島区有文書整理会を始動した。作業日は毎月第四水曜日の一三時三〇分～一五時三〇分。

作業場所は中島公民館。中島区からは区長の呼びかけで集まった地域住民七名が参加し、町教委からは長谷川幸子氏が、地域連携センターからは井上舞が参加して、整理作業の指導・助言にあたることになった。また、資料保存のために必要な中性紙封筒などの購入については、中島区が、町が交付している「自立（律）のまちづくり交付金」を申請し、これを充てることにした。

二〇一八年五月十六日に開催された第一回の整理会は、当時朝来市多々良木地区で実施していた区有文書整理会の見学とした。中島区有文書整理会の参加者はいずれも古文書を見るのも触れるのも初めてという方ばかりだったので、まずは実際の作業を見てもらい、イメージをつかんでもらいたいと考えたからである。当日は作業見学のほか、実際に文書を手に取ってもらったり、意見交換をしたりと充実した時間となった。

こうした準備を経て、五月三十日より本格的に中島区有文書の整理を開始した。最初に整理に取りかかったのは、中島区有文書である。この文書群は明治から昭和にかけての村役場からの通達綴や、区内の出役、農会、戦中の配給に関する文書など、近代の中島区の運営に関する多種多様な文書が含まれていた。

整理作業自体は、地域連携センターが日頃行っている整理方法を踏襲した。①クリーニング、②付番、③目録作成、④出納、という手順である。ただし、整理会を通して地域の歴史資料に触れてもらうという意図から、時間はかかっても良いので文書を読みながらゆっくり作業を進めてほしい旨を伝えた。このため、目録カードには文書を読んだときの感想や内容についてのメモを書き込める欄を設けた。採録した目録カードは中島区でエクセルに入力してもらい、地域連携センターでチェック作業を行った。資料点数が膨大であったため、この時点では写真撮影はいったん保留とした。

二〇一八年度は区有文書段ボール四箱分のうち、二箱の整理を終えることができた。二〇一九年度も引き続き月一回のペースで作業を進め、十二月までに全ての区有文書の目録を作成することができた。

第一回展示会の開催とコロナ禍での活動

区有文書の整理が完了した段階で、その成果を広く地域の方に知ってもらうため、展示会を開催することになった。開催は二〇二〇年五月のゴールデンウィーク期間中と決定し、展示資料の選定や、その他展示物の準備を進めていた。ところが二〇二〇年四月に新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、緊急事態宣言が発出された。諸々の活動や人々の移動が制限される中、四月の整理会は中止、展示会もいったん開催の延期を余儀なくされた。

その後も感染者が増大し、各地で開催されていた古文書整理会の多くが休止となる中、中島区有文書は五月に整理会を再開した。当時、同町の感染者はそれほど多くなかったこと、会場の中島公民館の作業場は広く、十分な換気が可能であったことから、手指消毒、マスクの着用、密集しない等、感染症対策に留意しながら作業を進めていった。延期になっていた展示会も七月に実施することが決定した。

こうして二〇二〇年七月二十三日から二十六日にかけて、中島公民館において、展示会「〜中島区有文書から知る〜中島の明治・大正・昭和の暮らし」を開催した（福崎町中島区・福崎町教育委員会・神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター共催）。この展示会では、整理した資料を展示するだけでなく、整理会の参加者らが撮影した、中島に残る文化財の写真を掲示したり、子供の頃に遊んだ思い出を記入した「思い出地図」や「小字一覧」を作成し、様々な形で「中島区の歴史」を再確認する仕掛けを用意した。また初日には、井上が資料解説を兼ねた講演を行ったほか、整理会の参加者が地域の子どもたちに「思い出地図」の場所を案内する「中島こども探検隊」も実施した。コロナ禍でもあり、わずか四日間の開催であったが、会期中は福崎町内のみならず近隣地域からも多数の来場者があり、整理会参加者の解説に耳を傾けていた。

中島区松岡家文書・五合堂文書の整理

第一回の展示会を終え、整理会では中島区松岡家文書の整理にとりかかることになった。こちらは近世末期から明治初期の文書が中心で、初心者には判読が難しく、また前述の区有文書よりも傷みが激しく、前欠・後欠の文書も多数あったため、整理会で一連の整理作業を行うのは困難であると判断した。このため、中島区松岡家文書についてはクリーニングのみを整理会で行い、写真撮影を町教委が担当し、その写真をもとに大学で目録を作成する方法をとった。一方で、撮影ができていなかった中島区有文書について、整理会で撮影作業を進めることにした。

また、整理会の発足時に整理対象となっていたふたつの文書に加え、五合堂から見つかった資料の調査も平行して行うことになった。ひとつは五合堂の修復に関する文書である。この文書群には昭和二十八年に屋根を葺き替えた際の中島村をはじめとする周辺の村々からの寄附帳や、修復にかかった支払いの明細などがまとめて保管されていた。もうひとつは、五合堂で使用されていた襖の下張り文書である。襖の破れ目から文書があることがわかり、参加者から何が貼られているのか知りたい、という要望があったため、下張りを剥がしていくことになった。この下張り文書は、一層目は版本をほぐしたものが使用されていたが、二層目には福崎出身の民俗学者・柳田國男ともゆかりのある眼科医院の文書が使用されており、新たな地域資料の発見につながった。作業量が増えたため、参加者らは文書整理組と、下張り文書剥がし組に分かれて作業を進めていった。

こうして二〇二二年九月に中島区有文書・中島区松岡家文書・五合堂文書・五合堂襖下張り文書、全ての目録の作成が完了し、整理作業は終了となった。これを受けて、二〇二三年二月に第二回目の成果報告展示会を開催することにし、以降は古文書の解読や展示の準備を進めることになった。

第二回成果展示の開催

第二回の展示会では中島区松岡家文書を中心に展示していくことになったが、その際、地域連携センターと町教委、そして整理会参加者で協議し、それぞれ自分たちの関心のある内容をまとめていくことにした。地域連携センター（担当・井上）は村を襲った災

害について、町教委（担当・長谷川）は福崎町域で採掘されていた石灰についてまとめることにした。一方整理会参加者は、明治初期に作成された旧藩（姫路藩）の調書を取り上げ、ここに記載された溜池と溝があった場所の比定に取り組んだ。溝については名称が変わっていたり、現存していないものもあったものの、小字や村絵図を確認したり、村の高齢者層から話を聞いたりして地図上に溝が通っていた場所を落とし込んでいった。

第一回目の展示では、展示構成の多くを地域連携センターが担ったが、二回目の展示では参加者からも展示内容についての積極的な意見が出され、より充実した展示準備を進めることができた。その理由の一つとして、四年間という長期にわたる活動を通じて、参加者の地域の歴史に対する造詣が深まっていったことが挙げられる。ほぼ全員が中島で生まれ育ち、中島という地域に愛着を持った方であったが、古文書の整理や内容の判読などは全くの初心者であった。しかし活動を続けていく中で、町史や郷土資料などを読み込んで知識を得たり、くずし字アプリを利用して文書の解読を試みる方など、様々な方法で中島の歴史と向きあう動きが生まれてきた。五合堂から発見された資料についても、「以前であれば気に留めなかったかも知れないが、（資料整理を経験して）これも地域の資料だから整理しておいた方がよいと思った」と仰っていたのが印象的であった。

もうひとつ、中島区松岡家文書は前述の通り、くずし字を読みながらの作業は難しいと判断し、整理会ではクリーニングしか行っていない。にも関わらず、展示準備に際して内容に踏み込んだ意見が多く出たのは、詳細かつ丁寧な目録と解題に拠るところが大きい。中島区松岡家文書の目録は、石橋知之（神戸大学大学院人文学研究科博士課程後期課程）と室山京子（神戸大学非常勤講師／研究）が作成したが、表題や備考が丁寧に記入されていた。また石橋が作成した解題には、解説している文書の番号が付してあり、それを手引きに目録を確認し、現物を出納できるようになっていた。展示会の準備を進めていた頃、整理会の参加者に渡した目録は、線が引かれたり、付箋が貼られたりと、何度も読み返された形跡があった。もちろんこうした丁寧な目録を作成することができたのは、文書の分量や作業時間などの条件がそろっていたからであり、今後作成する全ての文書目録に同じような方法を取り入れることは難しい。しかしながら「読んで分かる目録と解題」が、地域住民と地域に残る資料とを結びつけてくれる有用な媒介となり得ることは留意すべき点であろう。

こうして、二〇二三年二月二十三日から二十六日にかけて、中島区公民館において第二回成果展示会「中島区文書整理から分かった中島の歴史」（開催主体は前回と同じ）が開催された。初日には石橋知之が松岡家文書を素材に「村の受難と御救い――家出人が語る中島村のすがた――」と題した講演を行った。前回と同様、今回も中島区民をはじめ近隣地域からも多くの参加があった。

成果と課題

展示会の終了後、二〇二三年四月に最後の整理会を開催して、展示に使用した文書を箱に戻していった。また展示の際にふせんが落ちた文書や梱包が崩れた文書が多数見つかったことから、現物と目録の照合作業と再梱

包を行った。こうして、二〇一八年度から二〇二三年度にかけて、あしかけ五年にわたる中島区有文書整理会の活動は終了した。

最後に成果と課題を述べておきたい。中島区有文書は長らく公民館の中に積み上げられ、歴代の区長の幾人もがそれを見て、「なぜ置いてあるかよく分からないし、捨てることも考えたが、もしかしたら大事なものかもしれない」と思って、そのままにしていたという。かろうじて捨てられることなく、現代に命脈を保った文書は、地域住民の手によって整理され、今では地域の宝となった。長期に及ぶ活動となったが、かかった時間の長さが逆に、参加者らに地域の資料と向き合う十分な時間を提供することになった。その成果が、五合堂文書の整理や第二回の展示会につながっていったといえよう。

さらに中島区での活動の成果は、区内にとどまらず町内外にも影響を与えた。中島区での活動が周知されるに及んで、町内外から整理会の見学希望があった。また家や地域に残る古文書に関する町教委への問い合わせも増えた。あわせて、令和二年度より福崎町文化財保存活用地域計画の作成がはじまったが、これに伴う区有文書の悉皆調査でも中島での活動が知られており、調査をスムーズに進めることができた。地域の資料を自分たちの手で整理することができる、という事例が身近にあることが、こうした好循環を生み出したように思われる。

最後に中島区有文書の保全・活用に関して、課題を挙げるとすれば、今後の継承である。整理会の活動自体はひとまず終了した。今のところは整理会参加者が文書の管理に目を配ることができるが、今後は次世代に継承するための方法を考えていく必要がある。虫干しや、虫干しを兼ねた簡易展示会の開催など、過度な負担にならない形で文書を保全・継承していける方法を検討していきたい。